

エロすぎて田舎に追放されたシスターの おまんこを貪る話

※本編と一部異なる場合があります

トラック01

Hミリア 「あら、こんな時間にどなたでしょう？ つい、あなた様は……」

Hミリア 「まあまあ……！ 羊飼いの叔父様ではありますか！ どうされたのです？ こんな夜遅くに……」

〔…〕

Hミリア 「うへ、あら？ あらあら……？ これは……もしかして……」

Hミリア 「あのう……叔父様？ つかぬ事をお伺いするのですが……」

Hミリア 「もしかして……最近夜眠った後、変な夢を見たりしませんか？」

Hミリア 「例えば……そのう……厭らしくてエッチな夢たりしてえ……そのまま起きると夢精して……おぱんつ……お漏らししたりしていませんか？」

Hミリア 「あらあら、申し訳ありません……急に耳元で変な事を言つてしまつて……」

Hミリア 「ただ、何分叔父様のプライベートな事でしたので……誰にも聞かれないよう配慮した結果なのです……どうかお許しくださいませ」

Hミリア 「まあ、この教会には私しか務めておりませんので杞憂だったかもしませんが……」

Hミリア 「それで、どうでしょう？ 私の懸念は当たっておりましたでしょうか？」

Hミリア 「大丈夫です。ここで話したことは神に誓つて、誰にも言いふらしたりしませんから。どうか私を信じて素直にお答えください」

Hミリア 「まあ……やはりそうだったのですね……」
数日どれだけオナニーしても、毎日夢精してしまうと……」

Hミリア 「なるほど……では、本日この教会にいらしたのはその原因について私に相談したかった……といったところなのでしょうね……」

Hミリア 「そうですねえ……十中八九信じられないとは思うのですが……実は叔父様が今患っているその症状は病ではないのです」

Hミリア 「いつでしまえばそれは……”呪い”……と呼ばれる物でして……はい、通常のお薬では決して治らない厄介な代物です」

Hミリア 「それも、叔父様にかけられている呪いはどうやら淫魔によるもののようにして……その呪いにより恐ろしく性欲が高まり、夜に精力を搾り取られているようですね……」

Hミリア

「このまま呪いを放置していると、いつの日か全身の精という精を搾り取られて廢人になってしまつかもしれません……」

Hミリア

「つて、あらあら……ふふふ、そんな不安そうな顔をしないでください♪」

Hミリア

「叔父様、大丈夫ですよ♪ 確かに現代において呪いというのは非常に珍しく恐ろしい物ですが、きちんととした手順で処置すれば治りますから♪」

Hミリア

「はい、嘘ではありませんよ？ こういった呪いに対処する為に、今もなお私のようなシスターが現役で存在するのです♪」

Hミリア

「ん、んん、ん、はあ、はい、はい、大丈
夫です、大丈夫、大丈夫♪」

Hミリア

「きちんと責任を持つて治してさしあげますから…
…叔父様は何も心配せず、このまま私の言う通りにしてくださればそれでいいんです♪」

Hミリア

「はい……万事私に……教会のシスターである私に
お任せくださいませ……ふふふ♪」

トラック02

Hミリア 「ではすぐにでも処置を始めましょう♪ まずはどうぞ、祭壇の前で仰向けに横たわってください」

Hミリア 「大丈夫です。罰が当たつたりしませんから♪」

Hミリア 「そもそも祭壇とは、古くから人が神に対し捧げものをする為の場所……人と神とが唯一繋がれる場所といつても過言ではありません」

Hミリア 「ですから、」いついた呪いを払うには祭壇の前がうつてつけなのです」

Hミリア 「さ、叔父様。どうぞ遠慮なさいらず、そのまま横になつてくださいませ」

Hミリア 「ふふ♪ では私も、上……失礼しますね♪」

Hミリア 「ん、はふう……♪ ふふ♪ お・じ・や・ま♪ あらあ……そんな驚いたお顔をされて……♪」

Hミリア 「ふふ♪ まあいきなり抱き着かれたふうなりますよね……申し訳ありません♪」

Hミリア 「で、す、が、淫魔にかけられた呪いの処置は、他の呪いと比べると少し特殊でしてえ……♪」

エミリア

「ふ、ふん♪」「うやつて……ふう♪ 異性と抱き合ひながら……あまゝい蜜月を過ぐ」しつづけ魔が与える以上の快樂を叔父様に教え込み……最

高の射精へと導く……

「…………それが淫魔の呪いを解く、唯一の方法なんですか？」

「ん、んん……♪ ふふ♪ 今夜は」のまま……神様の面の前でいっぱい愛し合いましょう♪

「そう……淫魔の与える快樂なんかよりもう……」

「淫靡に……♪」

「怠惰」…………♪

「靈感的に……♪」

「ねいじゅう……ん」

エミリア
「体を重ねて……♪」

「愛し合ふ……♪」

「うしなつて……」

Hミコア 「快樂を貪りゆひへ……♪」

Hミコア 「さあ……、淫ひで長い夜の始まりです……♪」

Hミコア 「はあ～……む～ ちゅ……ちゅ、ちゅ～ れろ…
…ちゅ～～～ん、ちゅ……れろ、ちゅ、ちゅ～」

Hミコア 「んちゅ～ れろ……れろれろ……れろれろれろれ
る……ちゅ～～～ちゅ、ん、あゅ～ れろ……れ
ろちゅ……あゅ～」

Hミコア 「あら? 叔父様? 緊張していらつしゃるのです
か? 少し体がこわばりてしまつていて……ん、
ちゅ～ ちゅ、ちゅ～ 全身が固くなっています
よ?」

Hミコア 「ん～～ちゅ～ れろ……れろれろ……ん、ちゅ～
じゅる～ ん、ちゅ～ れろ……れろれろ……
ん～～～ちゅ～ ちゅ、ちゅ～」

Hミコア 「はあ、はあ～……はい、大丈夫です……私を信じ
て、受け入れてください……淫魔よりも更に上の
快樂を与え、私に夢中に差し上げますから…
…」

Hミコア 「はあ～む～ じゅる～ れろ……れろれろれ
る……ちゅ～～～ん、ちゅ～ れろ…
…れろれろれろれろ……」

Hミコア

「れへへわ……れわれわ……わ、んちゅう、
ちゅ、ちゅ、はむう……ちゅ、れわれわ……
ちゅ、ちゅ、」

Hミコア

「ん、ちゅ、れへへ、れわれわれわれわお……
ちゅ、ちゅう、ちゅ、れわれわ、れわ……んちゅ、
れわれわれわれわ……」

Hミコア

「ちゅ……ちゅ、ちゅ、はあ、叔父様あ……
ちゅ、れへへ、れわれわれわれわお、
じゅるる、ちゅ、ちゅ、」

Hミコア

「んふ、ああ、叔父様のお耳すい、甘
くつて……ちゅ、れへへ、れわれわれわ
ろおへへ、んちゅ、ちゅ、ちゅ、」

Hミコア

「はあへへ、ふふ、私の耳舐め、気持ちいいです
か? へへ、あらへへ、叔父様つたらあへへ、お顔…
…だらしなくなつてますよ!」

Hミコア

「ふふ、もしかして、叔父様は」のよつてお耳を
犯されるのは初めてなのでしょうか……」

Hミコア

「へへ、あらあらまあまあ、まあか耳舐めどり、
か女性経験がおありでないことは……つま
り叔父様は……性交渉の経験がない、ど・う・
て・じ、なのですね……へ」

Hミコア

「それはせがれ性欲も溜まつていた事でしちょう…
ああ……可哀そつな叔父様……へ」

H///コア

「ふふふ、やれなら尚更、叔父様には最高の快楽を
教えて差し上げなければなりませんね♪」

H///コア

「！」のまま、童貞には刺激が強い、ドスケベシスターのみ・み・な・ぬ♪ いつぱい感じてくれ
じ♪」

H///コア

「あ～～む♪ んちゅ♪ ちゅ～♪ わゅ、れろ
……れ～～……るれられられられお♪ じゅる
る♪ じゅうきゅうきゅうきゅう♪」

H///コア

「ん、はあ～～～～～♪ ん、わゅ♪ れろお
♪ れろれろれろれろお♪ じゅる♪ じゅるる
るるるるるるる♪」

H///コア

「んふふ♪ もつねお♪ お耳の奥まれえ……♪
じゅね♪ じゅねねねね♪ ……♪ れろ♪ れ～～
るれられりお♪」

H///コア

「あ～～♪ らるお♪ じゅる♪ じゅるねねね♪
～～♪ じゅうきゅうきゅう♪ ん、じゅうきゅう♪ れろ
れろお……♪」

H///コア

「はあ……む♪ らるお♪ らるれりお……♪
じゅうきゅうきゅう♪ れろ、わゅ♪ わゅ……れろれ
ろ、れられりお♪」

H///コア

「んちゅ～～～～♪ らる♪ じゅるね♪ じゅ
りゅ……♪ れ～～れられられお♪ らるれられろ
れろお♪」

Hミコア

「んちゅ……ちゅ……ちゅぱつ……れろ……れろ
ろお♪ れううろれろれろれろ……れろ、ん、
ちゅ♪ ちゅふ……ちゅ♪」

Hミコア

「んふう♪ れうう♪ れろれろれろれおお♪
じゅるる……じゅる♪ じゅぱぱぱつ……んちゅ
♪ れろれろれろれろおお♪」

Hミコア

「ん? んふふう♪ わゆ、ちゅううう♪
ちゅ……ちゅ♪ ん、ぱはあ♪ はあ、はあ…
…♪」

Hミコア

「叔父様あ……♪ ん、ちゅ♪ ふふ♪ いへー♪
叔父様のお・ち・ん・ぽお……♪ 私の太もも
に当たっておりまく♪」

Hミコア

「はああ……♪ 服の上からでも分かるくらい大き
く勃起されてえ……♪ ふふ♪ ハツチですね…
…♪」

Hミコア

「ああん♪ 大丈夫ですよ……♪ 今は呪いの治
療中ですか……？」

Hミコア

「神に仕える清楚で清純なシスターに欲情してし
まつてもいいんですよ……だって……」これは治療な
んですか……♪」

Hミコア

「はい、いいんです♪ 今はただ……快樂の赴くま
まに……叔父様のおちんぽを大きくさせて、感じ
てくださいませ……♪」

ヒミリア

「あへへねりや じゆねや じゆうをうとうへ
んかせや れへへわれわれわれわれわねや じゆ
ねねや じよねねねねりいへへ」

エミリア

「んふー、叔父様あ……、じょねー、れりを
れりをれりをれりをれりをい……じょねー、
じゅる……れーくわれわれおー」

エミリア

「せむりへ ちゑへ れる……ふかゑへ ちゑ……
かゑふかゑ……れい……れわれわれわれわれおへ
じよゆゆゆ……」

「んふうへ、ああ、叔父様の感じてる顔素敵で
すう……ちゅへ、んちゅへ、れろ……れろれろ
……れろれろおへ、じゅるへ、じゅるるるへ、ん、
ちゅへ、ちゅ、ちゅうへ……へ、ん、ぱはあへ
はあ、はあ……へ」

エミリア

「んん♪ 大の大人が私に夢中になつてくれると
思うだけで……もつど」奉仕して差し上げたく
なっちゃいます♪♪」

エミリア

「ふふふ、ああ……、耳の奥……叔父様の耳カス
が堪へて……ああ、ついともおじしゃべ……
♪」

エミリア

「……………」

エミリア

「あらあら～♪ 息だけじゃ耳カス取れませんね…
…それならあ…舌をねじ込んでえ…♪ しゃ
ぶり取つて差し上げます♪」

ヒミリア

エミリア

「ん、ちゅ……ちゅ、ちゅん、はあ、はあ……ふふ、叔父様、分かりますか?」

「今、私の舌の上に叔父様のくつさい耳カスがたくさん散らばって……これ、全部『くふん』してさしあげますね？」

エミリア

エミリア

「せ、ふ、い、こ、ぶ、は、あ、い、う、い、う、
う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、

エミリア

Hミコア 「ん、んん……お、叔父様……申し訳あります
ん……」

Hミコア 「想像以上に叔父様の耳カスが臭かつたのですか
……私、神に仕える聖女なのに……お下品にえ
ずいてしまいました……」

Hミコア 「ああ……ん、でもね……ふふふ、奥くて丑い匂いつ
なの……何故だかどつてもおじしく感じま
すう……」

Hミコア 「はあ、はあ……、はああ……、叔父様あ
……ん、ちゅ、もひとお、もひと耳カス
しゃぶり取つてえ……気持ちよくして差し上げま
すね♪」

Hミコア 「…………むひ…………、じゅる、じゅる
るうううう、じゅるる、んん、れううれ
るれろれれお、れろれれお♪」

Hミコア 「んちゅううう、ちゅぱぱり、れううれ
れろお、れろお、じゅるる、じゅりゅりゅ
りゅりゅうう」

Hミコア 「んちゅ、ちゅ、ちゅううう、れううれ
ろお、れろれれれれお、じゅるる、
じゅる、れろれれお♪」

Hミコア

「えふいへん、じゅるるりいへん、ああ、叔父様あ、じゅるる、じゅる……ん、ちゅ、れふるれられお」

Hミコア

「れるお、ちゅぶりー、あ、えわゆう、じゅる、じゅる、れふる、れふる、ちゅ……ちゅう、れふ、ん、ちゅ、ちゅ……ちゅ」

Hミコア

「はあ、叔父様あ、好きです、叔父様のお耳い、とつてもおじしじす……」

Hミコア

「れふるれられお、じゅるる、じゅる……ん、ちゅ、れられられお、じゅるる、じゅる、じゅうやうやう」

Hミコア

「んちゅ、れふるれられお、んふ、じゅるる、じゅるる、じゅる……ちゅ、れふ……ちゅ、ちゅ……ん、ちゅう、ちゅ」

Hミコア

「はあ……、ちゅ、れふるれられお、じゅるる、じゅる……れふるれられお、れふるれられお、」

Hミコア

「ん、ちゅ、ちゅ、ちゅぶり、れるお……れふるれられお、れふる、じゅるる、じゅるる、ん、ちゅ、ふ、ちゅ……ひき」

Hミコア

「れる……じゅるる、れる……れふるれられお、んちゅ……んちゅ……んちゅ……ん、ちゅ」

Hミコア

「ん、ふううううううううううううううう
れろおへ れろれろれろれろれろれろ
ちゅへ ちゅ、ふはあへ はあ、はあ……はふう
ううう」

Hミコア

「ふうううへ ああ……へ 叔父様あへ おちんぽ…
……もひ我慢できせんか?」

Hミコア

「早く窮屈なズボンから出しひ、シロシロオナニー
したいですか?」

Hミコア

「ふふへ どくもへ まだ駄田どくす……へ」

Hミコア

「もうともうつと性欲を我慢して、一気に解放して
あげなければ……呪いは解けませんから……」

Hミコア

「今は苦しいかもしれませんが……まだ射精、我慢
してくださいね?」

Hミコア

「ふふへ 素直な叔父様は好きですよ……? んへ
~ちゅへ ふふふふへ」

Hミコア

「では……今度は反対のお耳にじりぱいキスしてや
しあげますね……へ」

Hミコア

「ふふへ お・じ・や・まへ……へ んん……ああ
……へ 」あらもお……耳の香りを堪能してえ……
へ……へ」

ヒリア

エリニア

「はあ……はい！ はい はい……あ
ううう……予想はしておりましたが、まさか「ち
らのお耳までこんなに臭いとは……」

「あふう～……う、おえ……ふふふ……。」れ
はまた……しゃぶりがいのあつやつなお耳ですね
」

- 1 -

「では……叔父様……？」耳の奥で失礼致します

エリア

エミリア

「え、うーー、じょねー、じょねー、じょねー、うーー、
じょー、うーー、じょーーー、んわよ、れー、れー、
れー、れー、れー、じょねー、じょねー、じょねー、うーー、」

エミリア

「ん、ちゅ……ちゅ、れろ、ちゅ♪♪♪」
ちゅ、れろ……れろれろ……れろれろれ
ろお、じゅぬ、れろお、ちゅ……ちゅ」

「えちゅうへ はあ……♪ 叔父様あ♪ ちゅ……れ
ろ、ひな、ひな、からか くわくわくわくわく

「わ、わよ、わよへ んふ「ん れへへわわわわ
わねへ、わねへ、わねへ、わねへ、わねへ、わねへ」

「は、う、う…………うわ、あ、うう…………う、ん、れ～～…」

たくさん耳カスが取れましたよ?」

「これではいつか病気になつてしまふかも知れませ

スメ致します」

「ああ……あああ……♪ んふう～♪ やはり、叔父様の耳カスの味は格別ですねえ……♪」

「舌に乗せた際の臭みと喉を通つた際の引っかかり
方が絶妙で……♪ ああ……子宮の奥がピリピリ
して、メスとしての喜びが全身に響いてきますう
……♪」

「はあ、はあ……♪ やあ♪ 叔父様あ……♪
ん、ちゅ♪ ちゅ……ちゅ♪ れろ……ん、ちゅ
♪ はあ……♪ もつと私に叔父様の耳カスを食
べさせてください♪」

Hミコア

「れへるれられられられられお……へ　じゅるるへ
じゅりゅへ　ん……ちゅへ　れへるれられ
ろおへ　じゅるるへ　じゅるるるうへへ」

Hミコア

「んぶらへ　じゅるへ　れへるれられられおへ
じゅるるへ　じゅりゅへ　んちゅへ　れへるれ
られられおへ　じゅるへ　ん、ちゅへ」

Hミコア

「はぶらへ　んちゅへ　れへるれられられおへ
じゅるへ　じゅるるる……ん、ちゅへ　れへる
れられられおへ　ん、ちゅへ　れる……ちゅへ」

Hミコア

「んぶらへ　ああ……へ　また耳カスが沢山……へ
んぶらへ……ん、'jへり　'jへり、'jへり……
'jへり……」

Hミコア

「……ん、んん！？　ん、んぶらりー？　うつ！
げほつ！！　げほつ！　げほつ！　げほつ！
うつ！　おぼええええ……」

Hミコア

「う、けほつ、けほつ……あ……'う、'う……
ああ……耳カスが気管に入つて……けほけほつ…
…けほつ！　けほつ！」

Hミコア

「はあ、はあ……'う、'う……も、申し訳ありま
せん……無様な所をお見せしてしまいましたね…
…」

H//ツア
「ああ……ちゅ～んちゅ～れひ……れひれひ……
…れひれひれひれひ……じゅぬ～、じゅぬぬぬ～、
ちゅ～ん～～ちゅ～」

H///ニア
「んちゅ～ れ～～～ れろれろれろれろお～
じゅる～ じゅるる～ ん、ちゅ～ れわ～
～～われわれわれわ～」

「せぬ、せぬ……かをへ れぬ……んかをへ かを
……かをへ れへわれわれり……じをねへ ん、
じをねねへ ちを……かをへ」

「あ、う、う、う、う、う、ん、ちゅ、ふ、ふ、ふ、いかがでし
たか？ 私のみ・み・な・め、楽しんでいただ
けましたか？」

「ふふふ、それは何よりです♪ その調子でたっぷり感じて金玉に精子を溜め続ければ、いずれ呪いも解けると思いますので……」

「どうか……途中で射精しないよう……頑張ってくださいね？」んちゅふふふふふ

トライック〇三

Hミコア 「……………ん、叔父様……………♪ 私と田を合わせてくださいますか…………?」

Hミコア 「はい、ありがとうございます…………では、唇…………失礼しますね…………」

Hミコア 「ん…………ちゅ、ちゅ…………ちゅ、ちゅ…………♪ れろん、ちゅ…………ちゅ…………ん、ちゅ…………」

Hミコア 「ふふ♪ 叔父様…………♪ いかがですか? 発情したメスの唇は♪」

Hミコア 「世間ではよくレモンの味などと言われておりますが…………ん、私の唇、美味しかつたでしょつか…………」

Hミコア 「あらあら♪ やつですか…………♪ 気に入つていただけたようでなによりです♪」

Hミコア 「では…………もひとつキスしてもあげますね♪」

Hミコア 「ん…………ちゅ、れろ…………ん、ちゅ…………ちゅ…………れろ…………ちゅ…………ちゅ、ちゅ…………」

Hミコア 「はあ…………もうとお…………舌を伸ばして…………口器に涎を飲ませあいましょひつ♪」

エミリア

「ん、んん……ひな△、ひな△、はああ……
♪ ひな△、ああ△、叔父様あ……△、ひな△、
ん、ちゅ△」

H///コア
「ああ……♪ 素敵です……♪ いつも素敵であります……♪ ん、ちゅ～、ちゅ～、ちゅ～」

「はあ、はうう……ん、ちゅる れる……」

「もしかして勃起しすぎてボタンが飛んで行つてしまつたのでしょうか？　ふふふ、呪われていると
はいえ、叔父様の性欲にはビックリです♪」

「まあ」の年まで童貞であったことを考えれば致し方ないのでしょうが……

「いえいえ、大丈夫ですよ。引いたりなんとしてお
りませへん。」

Hミコア

「むしろ、やうやつて性欲を溜めれば溜めるほど、射精したときの勢いは強まり、呪いも吐き出されますので、このままもひとつ興奮してぐだれると嬉しいです♪」

Hミコア

「でも、中途半端にズボンにいたはおちんぽも息苦しいでしようから……」

Hミコア

「叔父様♪ ズボン、お脱がせしますね……♪」

Hミコア
Hミコア

「まあ♪ なんぞ立派なおちんぽなのでしょう♪
ああ……♪ 「んなに大きく反り返って……♪」

Hミコア

「ん、ふう……はあ、はあ……♪ あああ♪ 人は思えないほど逞しく、『立派で……♪ まるでお馬さんのおちんぽみたいですね♪』

Hミコア

「それでいておちんぽの先っぽ……亀頭はチン皮に挟まつて……ふふ♪ ああ♪ とつても可愛いおちんぽ様♪」

Hミコア

「はあ……♪ 勾いも……スン……スンスン……
すううう……はあああ……♪ ああ♪ 濃くてすりぱい香りい♪」

Hミコア

「毎晩包茎チノンポで夢精していた影響なのでしょう……チノン皮の中から残った精子が香つてしまひ……」

Hミコア

「ああ♪ スンスン♪ すうりゅう♪ はふう
うう♪ 皮を剥かなくても分かります…
…♪」

Hミコア

「今おちんぽ様をムキムキすれば…叔父様の…
チ・ン・カ・ス♪ 沢山付いているのでしじうね
…♪」

Hミコア

「はああ…♪ ん、『』へり…はあ、はあ…♪
叔父様…よろしいですか?」

Hミコア

「叔父様の包茎おちんぽ様…剥いちゃいますね…
…♪」

Hミコア

「ん…ん…しゃ…つと…ん、『』うやつて
…おちんぽ様の皮をつまんで…えいり…
…」

Hミコア

「ん、わあ…♪ あ、ああ…♪ 「これが…叔
父様のチンカスなのですねえ…♪」

Hミコア

「ああ…♪ 近くに寄らずとも香るむせ返るよう
なチンカス臭…♪ んん♪ お、おおお♪ 嗅
いでいるだけでメス声を上げてしまします♪」

Hミコア

「はあ、はあ…♪ もつと近くで嗅がせていただ
きますねえ♪ んん♪ スン…スンスン…♪
すううう…はああ～～～♪」

Hミコア

「んふりへ、お、お、お、おおおおへ、おほおお
へ、おおおへ、私の、聖女なのにいへ、ふ、ふ
ほおおへ、おおおへ、」の匂い騒ぐだけじゃ
下品な声が出てしまりますへ」

Hミコア

「んふりへ、おおおへ、ああへ、もつとおへ、スン
スン……すううへへへへへへへへへへへへへへ
…おほおおへ」

Hミコア

「ああへ、叔父様あへ、あ、ああへ、亀頭に満遍な
く降りかかったチンカスのふりかけえ……へ
とつともおじしゃうに我慢汁と混じつてカテカ
輝いておりますねえへ」

Hミコア

「ああへ、ん、いへへへへへへへへへへへへへ
思わず生睡を飲みこんでしまひませじ番ばしゃへ
…はあ、はあ…へ」

Hミコア

「叔父様あ……へ、これも、呪いを解くために必要
な事ですか……私の清楚で淫らなお口で……シ
スターのどるひどるの涎で、おちんぽ様を清めな
せていただきまへ……へ」

Hミコア

「ん……まづはおちんぽ様に舌を這わせて……ん、
れへへへへへへへへへへへへへへへへへへ
へ」

Hミコア

「れる……れろれろ……ちゅぱへ、ん、ちゅへ、れ
る……れろ……れへへへへへへへへへへへへ
れろれろれろ……へ」

Hミコア 「ん、はふ「ああ、ああ、叔父様のチンカスが舌に乗つて……♪」

Hミコア 「んふう～～～♪ ああ♪ 駄目です「あ チンカスの臭みで舌が痺れて……え「上手く、んん……喋れません……♪」

Hミコア 「はあ、はあ～～～♪ ああ♪ 臭い～～～♪ ひとつても臭いです「あ～～～♪ ああ♪ ん～～～♪ ぐり、ぐり、ぐり～～～♪ はあ、はあ～～～♪」

Hミコア 「う～～～～～～ああ♪ 喉越しもよくてえ～～ふふ～～」の苦みと臭みがおまんこ～～子宮に効いてきまくら～～」

Hミコア 「ああ～～ん、ああ～～ん、やあ～～叔父様あ～～れえ～～ダメです～～私、聖女なのにい～～清楚で清純な神に仕える聖女ですのにい～～」

Hミコア 「ああ～～ チンカスなんてくつせじ下品な食べ物を飲み込んでしまつたせいでえ～～ ああ～～ 痛いてしまいます～～おまんこ～～おまんこ～～の奥う～～子宮のお部屋がお漏らししちゃつてます～～♪」

Hミコア 「はあ、はあ～～～♪ ああ♪ 駄目え～～～♪ もつとお～～ もつとチンカスをください～～♪ チンカスを～～叔父様の臭い包茎ちんぽで造られたオスの排泄物をくださいませ～～♪」

Hミコア

「はあ～……む～、じゅる～、じゅるるる～、ん
ちゅ～、んん～、れ～～～、れろれろれろれろお
♪、じゅふ～、ん、ちゅ、ん～……ちゅ～」

Hミコア

「んぶ～～、ん、ん～……、じゅぶじゅぶ～
じゅぬ～、じゅうなこなこなう～～、じゅ～
♪、れろ、れろれろれろれろお～」

Hミコア

「ん、んぶ～～、んねねね～、お、ねねね～、ちん
ぽ様あ～、んちゅ～、れろれろれろれろお～、
ああ～、おちんぽ様あ～」

Hミコア

「んちゅ～、じゅる～、じゅるるる～、ん、ん～
れ～～～、れろれろお～～～、ちゅ～……ちゅ～
んぶ～～～」

Hミコア

「はあ～～、あ～……チン皮の間にまだ「んなにチ
ンカスが溜まつて～～、せむ、はむはむ……～
ん、はむ～～～～、むぶ～～～」

Hミコア

「れる……んん、もつるね……れろ～～～～～
ん、ぶはあ～～、はあ、ん～、ぶ～～～」

Hミコア

「「」のままあ……ん、口の中チンカスを聖女の唾
液と混ぜて～～～～、くわきくわきくわきくわき
くわきくわきくわきくわき～」

Hミコア

「んぶ～～～～～のままあ……んん……」べり～～～
く、「」べ、「」べ、「」べ、～～～～、ぱはあ～
はあ、はあ～～～」

ヒミリア

エミリア

「」の並び「」まで臭くて美味しい食べ物が存在していたとは……♪ ああ♪ ほのかにおしつの香りも混じつて……♪ ああ♪ 聖職者にあるまじきメス顔になつてしまいますう……♪

「もつとおへ もつと激しく……お口全体でおちん
ぽ様の残尿も、チンカスも、ざへんぶしゃぶって
綺麗に清めてあげますね♪」

「えらいな、え、えらいな、れいがわな……えらい
へ、じゆるへ、じゆゆる……じゆゆゆゆゆゆゆゆ
へへ！ ん、えぱぱうつー、ふふうー、ほほほうー、
せあ、せあ……へ」

「あ、うあ、うあ……」叔父様あ？ ダメですよ？
今、イキそうになりましたよね？ ん、ちゅ♪

「まだ射精してはいけません……絶対にダメですか
うね……？　ふかふか」

「ミツカ今は……んちゅ♪ れろれろ……私の激しいメス顔フュラに耐えて……オスとしての矜持を示してくださいませ♪」

「え、えふわ、じゅぬわ、れら、れわれわれ
れわおへ、じゅぬわ、じゅふわー、んふわー、
じゅるわ、れら……れわれわれわわわ」

「おおへ もういぬ……じまくへ れひ、れひれ
りおへ じまくねへ そ、そひ……へ ああへ
哉體汗霑れちやう……へ」

Hミコア

「んふりふ、ああ♪ まるで泉のようにチン汁が溢
れて……じゅる♪ じゅるるるううう♪ ジゅ
る♪ ん、ちゅ♪ れる、れるれる♪」

Hミコア

「はあ、はあ……♪ ジュル♪ ジュルルル♪ ……
♪ んふふ♪ 神に仕えるシスター!!」「んな……
臭いチン汁を飲ませるなんてえ♪ んむ……ジゅ
るる♪ ジュル、んふはあ……あ♪ 罪作りな
叔父様♪」

Hミコア

「ん、れろ……れろれろ♪ でもお♪ それも仕方
ありませんよね……だつて……じゅる♪ ジュル
るるううう……じゅる♪ れる、れろれろ……
…」

Hミコア

「叔父様は今……じゅる♪ ジュルル♪ ん、ん
ふう♪ 呪いを祓う為に、仕方なくしゃぶらせて
いるだけなんですからあ……んちゅ♪ れる、れ
ろれろ……♪」

Hミコア

「そつれす……」これは、んちゅ♪ れるれる……仕
方のない事なのです……だつてえ……」のドスケ
べすぎる変態フュウも、治療行為なのですから……♪

Hミコア

「んちゅ♪ れる、れろれろれろ……♪ ジュ
るる♪ ジュルルルううう……♪ ジュパッ!
ん、れうろれろれろお♪」

H///コア

「町にただ一人の聖女を……んぢゅ、」
セレチンカスちゃんぼで犯していいんだす「」

H///コア

「んぢゅ、じゅる、じゅるぬぬ……
ん、んぶう、ああ、れる、れられられれる
……」

H///コア

「はー、じゅる、じゅるぬぬ……
うれす、んぢゅ、れる、むりぬ、
じゅる、じゅるるる……」

H///コア

「んぶう、んぶう、ふはあ、はあ、
ふれる、れるれろお……じゅる、
んぢゅ、ちゅ……わす」

H///コア

「叔父様の欲望のままに……メヘの頭をねじりか
みにし、喉奥にチンカスを「びり付かせるつもり
でえ、思いつき喉まぐ」、犯してくだっても
いいんですよ……。ふふふ」

H///コア

「ん？ あら、叔父様……。う、ふえ！？
ん！ んぶう、んぶう、んぶう……。じゅる、
んぶう、じゅぶぶ、じゅるるる……
んむう、ふふ、ふふ、んぶう、んぶう、
んぶう、んぶう……」

H///コア

「ん、んぶう……。じゅる、
ぶう、じゅぶじゅぶ、じゅぶじゅぶ、じゅぶ
ぶじゅぶじゅぶ、じゅぶじゅぶ、じゅぶ
じゅぶじゅぶ……」「

「んぼおお……おぼおお！ んぶう！ じゅる

「エリナ、アーネスト君がお見付かれた。」

କାଳିତ୍ୟରେ ପାଦମଧ୍ୟରେ ପାଦମଧ୍ୟରେ ପାଦମଧ୍ୟରେ

「えがうひー！ お、おじさん……んぶうー。」

「...」
「...」
「...」
「...」
「...」
「...」
「...」
「...」
「...」
「...」

ミニアード、おおや！ ぐるぐるジーン……。あらあ！

.....جیاں جو نہیں

「んがうつ！ お、おまお…… お、お！」

「ん、けほつけほつ……！」う……喉おぐ……チン

力が強烈にして、おええええええええええええ

[REDACTED]

エミリア

エミリア

「へふ……おえ……うふ……ああ……はあ、はあ……へ、ああへ、叔父様あ……え、う……はあ……へ、ああへ、叔父様あ……」

「まさか」「まだ激しく私のロマン」を犯し、虐めてくれだされるとせ……。ああ……それにチン汁とチンカスを執拗に喉に擦りつけ、膣に流し込んできてください……。」

「ああ、ん、」
「ああ、ん、欲
望に任せた素敵なイラマチオでした♪」

「ニ」れでまた、金玉にも精子が堪って、ぐつぐつと
煮えたぎつてきましたね……はい、いい調子で
す

「では、もう十二分に性欲も溜まってきたと思われますので、」そのまま浄化の儀式……セックスを始めたいと思うのですが……」

「実はその前にもう一つだけしておかねばならない事があります……」「…………」

「叔父様には神聖なおまん」セックスをする為に身も心も清めてもらいます……

「はい……聖女から洩れる聖水を……まあ俗な言い方をしてしまえば、私のおしつこ」を……叔父様に飲んでいただきますね♪ ふふふ♪」

Hミコア 「ん、んふう…………へ はあ、はあ…………へ 叔父様、いかがですか？ 初めてみる聖女のおまんこ」は

♪

Hミコア 「はあ、はあ…………へ 今まや」と、叔父様の皿の前に跨り突き出された、神聖なメスまんこ」は

♪

Hミコア 「少し黒ずんだ無数のビリビリに、マン汁が渴いてきた汚いマンカス…………へ ピンクのマン肉の奥に見える尿道と子宮に繋がるまんこ穴…………へ」

Hミコア 「散々叔父様を興奮させるために」奉仕したせいか……おまんこの奥……子宮からメス汁が零れ落ちてしまつて……へ」

Hミコア 「ふふふ、ああ…………叔父様のお顔にポツポツと垂れてしまつてますね…………へ」

Hミコア 「はあ、はあ…………へ ああふ、叔父様あ…………へ 今からあ…………」へ」へ」へ おまんこをお口に押し付けて、いっぱいおしゃここの穴を舐めて、しゃぶつて、私のおまんこ舐めてくださいわ」へ」

Hミコア 「そしてそのまま私の体から聖水を…………おしつ」を出させて叔父様に飲んでいただき、体の内から清めさせていただきますね」へ」

Hミコア 「ああ…………それでは、こちら、失礼致しますね」へ

Hミコア

「あ、あん♪ ああ♪ 叔父様あ……♪ はあ、
はあ……♪ ああ♪ ふふ♪ 叔父様の唇……
とつとも温かくて柔らかくて……♪」

Hミコア

「ああ♪ おまんこビーリビーリがウネウネ吸い付い
ているのが分かります♪ はあ……♪ 「これえ
……とつとも気持ちいいじ……♪」

Hミコア

「さあ♪ 叔父様も遠慮せず、そのお口で聖女のお
まんこを食べてくださいませ♪」

Hミコア

「んあい♪ あ、あ、あ、あん♪ やあ♪ 叔父様あ……
…♪ あ、ああ……ふふ♪ ああ♪ お上手で
すう♪」

Hミコア

「ふふ♪ ああ♪ まずはあ……♪ んん♪ おま
んこビーリビーリをハムハムするんですねえ♪ ふ
ふう♪ ああ♪ 童貞らしく可愛い舐め方♪」

Hミコア

「ああん♪ やあ……♪ 申し訳ありません♪ 馬
鹿にしたつもりはないのですが……あん♪ ふふ
♪ 恶る悪る口の中でマン肉を味わう叔父様の姿
が可愛くって……♪」

Hミコア

「ふう♪ ふう……あん♪ やあ♪ ふふふ♪ ああ
……」の童貞臭い舐め方あ……クセになっちゃい
ますう……♪」

Hミリア

「ん、んん♪ あ、あ、ああ……♪ でもお♪
そんなおまん」の入口だけ舐められてもお……
聖水は出できませんよお?」

Hミリア

「さあ、叔父様♪ どうか……もつと奥まで……
そうです……叔父様に舐めて欲しくてヒクヒクし
てる、ピンクで歓らしきおしつ」穴……膚めぐ
ださじませ……♪」

Hミリア

「ん、あ、ああん♪ やあ……♪ 叔父様あ……♪
そこは違いますう……♪ そ」は、ん、あ、あ
ん……♪ おしつ」の穴じゃなくてえ……♪
はあ、はあ……♪ おまん」の、穴ですよ?」

Hミリア

「ん、はあ、はひいん! あ、ああ……! あうう
……♪ ん、んみゅう……! あ、あう……!
はあ、はあ……♪」

Hミリア

「はあ、はあ……♪ あん♪ ふふ♪ 気にしない
でください……童貞がおまん」とおしつ」の穴を
間違える事はよくある事ですから♪」

Hミリア

「はい、全然……ん、あん♪ 気にしなくていいん
です……♪ 今日私のおまん」で覚えていついく
だされば……あん♪ はあ、はあ……♪」

Hミリア

「やあ……叔父様つたらあ、ん、あん♪ まったく
もう……ダメですよ? 人の話を聞かずに舐め続
けては……う、あうう……♪」

Hミコア

「「へりへー、んもひー、めつ！ ですよ。ふふ
ふ はい、めつ！ です♪」

Hミコア

「せあ……かやんと見てくださいやー」「！」です……
聖水の……おしご「の穴は……」「つち、ですよ……
…♪」

Hミコア

「はい、やうです♪ ふふ♪ では……おのまめ…
…舌をれへへへつてしてくだれこ♪ もん、はい
♪ れへへへへへへ、ひやあん…？」

Hミコア

「あ、あ、あああ……♪ やあ♪ ん、んふう♪
お、おおお♪ 叔父様あ♪ ああ♪ イイですう
♪ や！」お♪ ん、はつ、はつ、はうう……♪」

Hミコア

「ああ……♪ あぐりり……♪ うう……♪ ん
ふう……♪ ああ♪ 狹いおしご「穴にい♪ 叔
父様のなが~い舌が入つてきてしま♪」

Hミコア

「んふう♪ おおお♪ お、お、お、お、お、お、
お、おおお♪ おほおおお♪ おおおお♪ おおおお♪ 田る♪
ト品な声が出ちやこましゅう♪」

Hミコア

「はあ、はう♪…… あ、あ、あああ……♪ ん
ふう♪ お、おおお♪ おおおおお♪ おおおおお♪ 素晴らし
い……素晴らし……舌使じです♪」

Hミコア

「あああ……♪ とても童貞とは思えない……激し
い吸い付き♪ ああ♪ 神の御前で披露しても
恥じない、素晴らしいしゃぶりつきです♪」

H///コア

「ああん、ん、んほおねん、おおねおね、しゅ~」
いいへ あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ
ん、はあ、はうへ……へ」

H///コア

「さひるへ ねねねへ ねりせおねへ んふ'りへ
ねまく」ねへ ねしつ」ねへ ね、おおおへ 吸
じ出されりをうへ んふ'りへ 聖女のねしつ」
絞りだされまひを'りへ……へ」

H///コア

「んほおね……へ ね、おおおへ ねほおおへ
お、お、お、おおおおへ ああ……へ 叔父様あ
へ 叔父様ああへ あ、あああ……へ」

H///コア

「はひじへ んほおねへ お、お、お、お、お、
お、お、おおおへ あああへ やあへ 叔父様あ
へ んああへ あ、あ、あ、あああへ」

H///コア

「はあ、はあ……へ んああへ う、う'りへ
あ、あ、あ、あ……へ んひう'りへ 出ひやい
ましを……へ 聖女のねしつ」」……へ メヘのお
漏'りしおじ」」ねじ」」出ひやこましを'りへ……」

H///コア

「やああへ あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
へ お、おおおへ イ、イグ'りへ……へ んひい
へ お、おおおへ お、お漏'りじ」」へ 気持ち
いお漏'りじ出ひやこましを'りへ……へ」

ヒリア

「あ、あ、あ、ああゝ、叔父様あゝ、じいかあ……
じいかお口を大きく開けてください……ゝ、その
ままあ……ゝ、おじいこをへ……おじいこ流し込
みますからあ……ゝ」

「ん」おおふ、おほおおおおおふ、お、おおおおおふ
あああ……、で、出つゆうう……ふ んひい
ふ、ね、おじい」おおふ、あ、あ、あ、あ、ああふ
おじい「おぬ瀧りへキましゅうう……ふ」

「あ、あ、あ、あああ……！ ああ！ イイツ
イグう！ イグイグイグイグイグイグイ
グうう…………んひい…………お漏らしつ
ぎゅうううううううう…………！」

「はうひいいいいいいいい…………？」

「ん懶おおおおおお……！　お、おつほおお……
……お、お、お、おおおお……！　あああ……
……ねこい！」おお……！　ああ、叔父様のお
口にねこい！」玉こわしがおなづか……！」

「えおねね……へ、お、おおおへ ああ……！」れえ
……お灑すくりし、神様の田の前でお灑すくりし
……はひ、へん、おおおへ すい」へ氣持ちよ
へつてえ……へ、ああへ 幸せですうへ……へ」

エミリア

「ああ……、叔父様あ……、やお、喉を鳴ら
しながらお飲みくださる……、はあ、ああ……
、聖女のお腹で熟成された聖水いい……、甘
くておいしいメスのおしお」お父さん

「ん、あ、ああ……ん、どうぞおふ、まだお替りも
ありますか、うあ……おふ、おおおふ、ああ……ん
お替りでうわ……お灑、うい、お替り出ま
すうう……ん、」

Hミリア
「はひいいい…… んおおおふ お、お、
おおおおふ はあ、はひい……ああ、またあ
叔父様のお口におしつ「おふ」

「はあ、はひふ……ふ、お、おおおおふ、ああ……ふ、黄色い尿がじょろじょろ注がれてえふ、ん、はひふ……ふ、あ、ああ……ふ」

「はあ、あうう……叔父様あれあ……喉を鳴らしながら……あん♪ 思いつきつい……露わざ全部飲んでください……♪」

「ん、ん、ああん、はあ、はあ……、ああ……あと、ん、もう少しで終わりますからあ……お漏り止まりますから……。」

「ん、あつ、あ、ああ、んあ、あ、ああ、はあ、はあ、はふ、」

Hミコア

「ん、んふふふ、ああ……♪ これで、ん……お
しつこは打ち止め……ですね♪ はあ、はあ…
ん、はふう……♪」

Hミコア

「叔父様あ……♪ 私のおしつこの味はいかがでし
たか……? つて、あらあらあら、ふふふふふふ♪」

Hミコア

「そんな恍惚とした表情をやられて……ああ♪ 頑
張つておしつこを出した甲斐があつたといつもの
です♪」

Hミコア

「はあ……♪ 叔父様あ……♪ 私のおしつこを飲
んだ」とど、体の中も清められたことですし、最
後に儀式の締めを……セックスを♪ 致しましょ
うね……♪ ん、ちゅふ♪」

Hミリア 「叔父様はその場で寝そべつたまま力を抜いてください……」

Hミリア 「セックスは全て、私の主導で行わせていただきますので……叔父様はただ、マン汁に塗れた聖女の蜜壺をお楽しみいただき、最高のおちんぽ射精をしていただくだけで大丈夫です……♪」

Hミリア 「おしつこによつて清められた叔父様の体は、既に淫魔にとつて居心地の良い場所ではありますから……」

Hミリア 「出でいきたがつてる淫魔の呪いを、叔父様の精液と共におまんの中に注ぎ込み、聖女の子宮で呪いを祓う……それが最後のおまんこセックスなのです」

Hミリア 「ここまで散々叔父様の情欲を煽り、我慢を強いてきましたが、それもこのおまんこセックスで終わりとなります……」

Hミリア 「ですから……叔父様♪ 最後は思う存分、欲に塗れた激しく厭らしいおまんこぐちゅぐちゅセックス、しましようね♪」

Hミリア 「ああ……♪ おちんぽ様の先っぽが聖女のメスまんこに触れて……♪ ふふ♪ ああ……♪ 叔父様もこれで童貞を卒業されるのですね……♪」

Hミコア

「この年まで大切に育ててきた童貞おちんぽ様……♪ ああ……♪ ものよくな味なのか……今からとっても楽しみで楽しみで……ん、んん♪ マン汁が溢れて止まりません……♪」

Hミコア

「ああ……♪ あ、あ、あ、ああ……♪ 叔父様あ♪ いきますね？ 人生最初で最後の童貞卒業セックス……はい、頂いちやいます♪」

Hミコア

「んあっ！ あ、あ、んっ！ ひやああああああああ……♪」

Hミコア

「んほおおおおお……♪ おおお……♪ お、おおおおお……♪ お、おおおおお……♪ お、お、お、おおお……♪」

Hミコア

「んあっ！ お、おおおお……♪ お、叔父様あ……♪ お、おおおおお……♪ お、お、お、おふうう……♪ ふう、ふううう……♪」

Hミコア

「は、はひい……♪ ああ……♪ 叔父様のおちんぽお♪ んほおお……♪ お、おつきい……れすう……♪」

Hミコア

「はあ、はあ……ん、はふう……♪ ああ、流石淫魔の呪いが混じった、極悪おちんぽ様ですね……はあ、はあ……ああ……おちんぽ様にかかった呪いが、おまんこの中で浄化されていくのが、んん♪ 子宮で感じられますう……♪」

Hミコア

「はあ、はあ……ん、ああん……あ、ああ……
♪ う……ひぐう……？ あ、ああ……叔父
様あ……ん、ビクビク動かされると……ひ
ぐう……？」

Hミコア

「お、おおお……♪ あう♪ ……♪ ああ……♪
だ、ダメです♪ ……♪ いくら聖女のおまんこが
頑丈といつても、！」まで大きなおちんぽ様が相
手では……あん♪ 感じゅきて……」

Hミコア

「はあ、はあ……♪ ああ♪ 叔父様あ……♪
はあ、ああ……♪ もう我慢できないんですよ
ね？ 動きたくて動きたくて仕方ないんですね
……？」

Hミコア

「ん、はあ……はい……分かりました……私も、少
しづつ、ん、あん♪ おまんこが馴染んできまし
たので……」のまま聖女とは思えない、ドスケベ
な腰振り♪ セセティングいたしますね♪

Hミコア

「ん、あ、あん♪ あ……お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、お、お、
おおおお♪」

Hミコア

「んほおお♪ お、おおお♪ 叔父様あ……♪
ああ♪ 叔父様のちんぽお♪ やっぱり大きくな
ってえ♪ ああん♪ といつても素敵です♪♪」

Hミコア

「んひー……♪ お、おおお♪ 思わず……♪
お下品な声が漏れてえ……♪ ああん♪ おつ
ほおお♪」

Hミコア

「おおおお♪ お、お、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、おおおおお♪
おおおおおおおお♪」

Hミコア

「んふう……♪ ああ♪ 鬼茎のながーい皮がマン
ひだに凹つかつてえ♪ あああ……♪ 好きい
♪」の感触とともに氣持ちいいです♪……♪

Hミコア

「ああ♪ あ、あ、あ、あああ……♪ ん、ん
ふうう……♪ お、おおおお♪ ナン皮あ……♪
ああ……♪ 気持ちいいです♪……♪」

Hミコア

「はー、はひー……♪ ああ……♪ 童貞ちんぽで
もお……」んなにおじしくて気持ちいいなんてえ
♪ ん、はひー……♪ ああ……♪ 全然知
りませんでしたあ……♪」

Hミコア

「はあ、あ、あん♪ やあん……♪ 何ですか?
童貞おちんぽ褒められて喜んでいるのですか?
ふふふ♪ あらあら♪ お可愛いおちんぽ様です
ねえ……♪」

Hミコア

「ん、でしたらあ……♪ ん、んん♪ もうひと可
愛く嘘いいただいたためにもお……♪ もう少
し、んん♪ 激しくおまんこパンパンをせていた
だきますね♪」

エミリア

「えへへ せむへ ねめじパンペハヘ ねめじパン
パンパンヘ ねめじパンパンヘ ねめじパン
パンヘ」

「ああ叔父様あゝ もつとおゝ もつと可愛い歸れ
声を私に聞かせてくださら」

「ん、あ、あ、ああ……♪」にはあ♪ 私と叔父様と神様しかおりませんからあ……♪ あ、ひやん♪ 教会中にい♪ 叔父様の厭らしい声え……♪ もうと響かせてくださいませえ……♪」

Hミツア
「ん、せひじ……！ んほおおおお……♪ お、叔父様っ！？ も、そんにや、急に激し……！」
ひゃんっ…？」

「ア、エエエエ……ああ、んあ……あ、

「う、んううう……！ ああゝ んあ……！ あ、
あああ……！ 叔父様あ……！ あ、あ、あ、
あ、あ、あ、あ、あああ……！」

Hミコア

「ああ♪ 叔父様あ……♪ う……♪ んひい……♪
お、おおおお♪ そ」お……♪ お、おおお
♪ おぐり……♪ 千畳の入口♪……♪ ん
！」おね……♪ お、お、お、おおおお♪」

Hミコア

「ん、んひい♪……♪ お、おおおお♪ も」咲か
れるのイイれすう……♪ んふう……♪ お、
おおお♪ ああ……♪ 聖女の入口♪……♪ 赤
ちゃんの入口♪……♪」

Hミコア

「はあ、ん、はうう……♪ う、ううう……♪
あああ……♪ だ、ダメです……♪ 叔父様あ……」

Hミコア

「あ、あ、あ、ああ……♪ それ以上子宮を口ン
口にせれては……ん、んひい……♪ お、
おおお♪ 叔父様が射精するより先に私がイキま
しゅう……♪」

Hミコア

「ん、んほおお♪ お、おおお♪ あああううう
♪ あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
ううう♪ ん、んほおお♪ おおおううう
お、おおおううう♪」

Hミコア

「ああ♪ ほ、本当にイグう……♪ あああ
♪ イキましゅうう……♪ ん、んひい♪
おおおううう！ んあああ……♪ イ、イグう
……♪ イグイグイグイグイグイグイグイグう
……♪」

ヒリア

エミリア

三二

「ああ、聖女なの」「んな簡単にお漏り……ん、さう……、ああ、神の前で無様なマン汁お漏らしを晒してしまいましたあ……」「

エミリア

「んあ……、はあ、はあ……、おあ……、
も、申し訳ありません……」んな下品で醜いメス
の醜態をやりしりしまつ……」

Hミコア 「お詫びになるか分かりませんが……どうかこれで
許してくださいませんでしょうか……?」

Hミコア 「ん……ちゅ～ ちゅ……れる……れるれる……ん
ちゅ……ちゅ……ちゅぶ～ ……わゆ……ん～
ちゅ～」

Hミコア 「はあ、はふ～…ふふふ～ ああ……叔父様の唇
……私のおじつ～の味が致します……」

Hミコア 「ふふ～ 先ほど飲んだ聖水の残り香ですね
ああ……我ながらおいしそう～」

Hミコア 「ん……ちゅ～ れる……んちゅ～ れるれる……
」のまま……んん……ちゅ、れる……れる、ちゅ
♪ 舐めとつて差し上げます……」

Hミコア 「ちゅ～ れる……れるれる……んちゅ～ ちゅぶ
……ちゅ、れるれる……ちゅ……ちゅぶ……ん～
～ちゅ～」

Hミコア 「ああ……叔父様あ～ 私の涎もお……聖女の下品
な涎をお飲みください～」

Hミコア 「んふ～～～ ら れ～～～ ら ん、じゅる～
じゅるる～～～ん、ちゅ～ れる……れるれるお…
～」

「はあ、はあ……んふわ～……、れ～～～れろ
れろ……れ～～～～～、じをぬ、じをぬじをる
……ん、ちゅ～、ちゅ、ちゅ～」

「はあ、はあ……♪ ああ……叔父様あ……♪

のまま……キスしたまま、またおまんこセックスをしたいと思うのですが……いかがでしょう?」

「はい……上のお口でも下のお口でも……叔父様と
一つになりたい……繋がってみたいのです……ダ
メ、ですか？」

「ああ、ありがとう。ありがと」やうやく、では、「のむね……キスしながらヤックス……ややていただきますね?」

「サボウ…… カク、ルーチョウ、ジヌルハ
ジヌルハルハハハハハハハハハハハハハハ
ルカク、ルカク、カク……カク、カクハ」

「んふうへ あ、あん♪ ああ♪ 叔父様あ♪ ん
ちゅ♪ ちゅぱつ！ ちゅ……んちゅ♪ れり、
れろれろれろれろ♪」

H//コア
「ちゅ～ん、ちゅ～れろ……れろれろれろれ
ろお～ん、んふう～ああ～叔父様あ～好
き……～好きです……ちゅ～ちゅ～ちゅ～」

H///コア

「ああ、ん、んふう、」「いやつて……、ラ
ブリーフキッスしながらあ、おまえ」「パンパン氣
持ちよくしてくれる殿方なんじゃ、ん、あ、
ああ、今までござんでしたのじゃ」

H///コア

「ん、んふう、ちゅ、れろ、れろれろれろ
……、んちゅ、ちゅ、ちゅうう……、ちゅ
ぱあ、ふふふ、ああ、叔父様とのリブリーブ
セックス……最高ですう」

H///コア

「さふり、ちゅ、んちゅ……ちゅ、ちゅ
ちゅ、ちゅ、ちゅ、ちゅ、んちゅ、ちゅ……
れ、れろれろ……れろ、ちゅ」

H///コア

「はあ、はあ……、ん、あう……、ちゅ
れろ、れろれろ……れろ、ちゅ、ん……
ちゅ、ん、ふああ……」

H///コア

「はあ、あ、ん、ああ……あん、やあ……
んおおおへへ、お、お、お、お、お、お、
おおおへ」

H///コア

「はあ……、あううう……、んふう、
お、おおお、ああ、叔父様あ、ん、ちゅ
れろ……れろれろ、ちゅ、ちゅ」

H///コア

「はあ、好きです、叔父様の事も、おちんぽ様
の事も、ああ、私の事……もつと感じてくだ
さじませべ……」

エミリア

んちゅ～ れろ……れわれわ……ひゅ～ ん
ちゅ、ちゅ、ちゅ……～ せあ……～ んあ～
あ、あ、あああ……～』

エミリア

「んぬね……ふ、お、お、お、おおおねふ、おおおね…
…ふ、お、おおお……ふ、お、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、おおおふ」

エミリア

おおお、イイれすう、ああん、その調子
でえ……もつとお……んん……もつとねちんぽ様
で私のおまんこ……かき回してくだせー!」

正義元

三
元

ふはあ♪ ああん♪ 紅父様♪ がはあ♪ お
耳舐められた途端、ビクンって腰が跳ね上がって
……ふふふ やっぱり、耳舐め……お好きなんで
すね……♪

エミリア

「まあ、まあ……。でしたらね……ん、あんた
ふふふ、かいし……おまえ」しながら耳の風……
しゃぶつておながくね」

エミリア

「え、 んわお「ハ……ハ カサハ れるれん……れ
へるれれれれれれれれおハ、 ジョヌヌハ ん、
ジョヌハ ジョヌヌヌ「ハ」」

ヒミツニア

「んふうー、れろ……れろれろ……じゅぬぬ
じゅりゅ……れううふ れううれろれろ……
ん、んふう……ふ ちゅ、ちゅふ」

エミリア

エミリア

「あああ……ん、じをねる、じをねる……れ
われわれり……ん、わ、わ、わ……わ
ふ」

ヒミツア

「せお……せお……へ ん、ちをへ れる……れわ
れわれわれわへ ん、れへわれわれわ……へ
じをねへ ジをねねねへ」

「スル...ア セル...ナシ...ア」

エミリア

「ん、れる……れるれる……んふふ、ちゅ……
ちゅ、ちゅ、れる……れるれる、ちゅ、
ちゅうう～ちゅ、ふはあ、はあ、はあ、」

エミリア

Hミコア

「んほおおふ、おおお～～～ふ、セ～おふ、おちん
ぽ様の段差が丁度良く引っかかつてえふ、ん、
ああんふ、やあふ、叔父様ったらあ……ふ、千画
ひつくり返やうとしてくるのですかあ……ふ。」

Hミコア

「んもう……聖女の子宮をつぶそうだなんてえ…
ん、ああんふ、本当に罪作りな叔父様ですう…
ふ」

Hミコア

「はあ、ん、あ、ああんふ、お、おおおお…
ふふふ、ん、あ、あ、ああ…ふ、ん…ちゅふ
ふふふふ」

Hミコア

「ああ……本当に……ん、ああん……叔父様のおち
んぽは最高で……ん、お、お、お、おおおふ
おつほおお……ふ、「んな素晴らしいおちんぽ様
に出会えた幸運に感謝したいぐらじですうふ」

Hミコア

「はあ、はあ……ふ、ん、ああんふ、なのでえ…
ん、とびっしゃの感謝を込めてえ……ふ、ん、ん
ほおおふ、お、おおお……ふ、んふうふ、はあ、
はあ～……ふ」

Hミコア

「ん、んふう……ふ、はあ、はあ……ふ、いつかの
お耳にもおふ、スケベな耳舐めふ、してねしあげ
ますねふ」

Hミコア

「ん……ちゅ～ ちゅ～ふ～ んちゅ～ れ～～～
れろれろれろれろお～ ちゅ～ふ～！ んちゅ～
れろ……れ～～～れろれろれろれろお～ ジゅ～
る～ ジゅ～ふ～！ ん、ちゅ～ れろ……れろれ
ろれろれろ……～」

Hミコア

「ん、んん～ んちゅ～ ちゅ～ ちゅ～ んちゅ
～ ちゅ～ れろ……れろれろ……れろれろれ
れろお～」

Hミコア

「んふ～～～～～ ちゅ～ れろ……れろれろ……ん
～～～～～ちゅ～ ふはあ～ はあ、はあ～」

Hミコア

「ああ～ 叔父様～～～～ もつと激しく～～
ちんぽパンパン～～ ねちんぽパンパン～～」

Hミコア

「はい～～ セリドウ～～ お上手お上手です～～
～～～ つて、ん、あ、あ、あ、あん～ やあ～
セ～」お～ 千両の入口を擦るよにい～～ ん、
んひい～ お、お、お、お、お、お、お、おおお
～」

Hミコア

「おほおお～ あ、ああん～ ん～～ちゅ～ ちゅ
～～ちゅ～ はふ～～ ああ～～セ～」お～ グリ
グリしてください～～」

Hミコア

「赤ちゃんが出てくるメスの穴～～～ プニッと
したおまんこ穴あ～ 子宮の穴あ～ 存分に突い
て、オスの味を刻み付けてくださいませえ～」

H///コア

「んふう……ん、ん、れへへわれわれわれわれわ
へ、じゅるるへ、ん、ちゅへ、れへへわれわ
るおへ、じゅぶぶつ…、じゅぶつ…、ん、ちゅへ
れへへちゅぱりへ」

H///コア

「わせへ、れへへろれわれわおへ、じゅるるへ
じゅるへ、ん、ちゅへ、れへへろれわれわおへ
れへへ…、んちゅへ、ちゅへ…、ちゅへ」

H///コア

「んふうへ、れへへへ、じゅるへ、じゅるるへ
じゅるへ、んちゅへ、ちゅへ…、ちゅへ、れへへへ
れわわわわわわわおへ」

H///コア

「わせふう…、わせ、んへへちゅへ、ちゅへ、れ
ふへへ、れわわわわわわおへ…、じゅるへ
じゅるるるへ、ん…、んちゅへ、ちゅへ、ちゅへ」

H///コア

「んふうへ、はあ、はあ…、ああへ、叔父様あ
へへ、ん、あ、ああんへ、ああ…、子宮グリグ
リ…、へ、んひ…、お、おおおへ」

H///コア

「ああへ、子宮にチンカス擦りつけられてします…
…、あへへへへへ、あ、あ、ああへへへへへ
や、へへ…、あ、あ、あ、ああああ…
へ」

H///コア

「ん、んひい…、お、おおおへ、ん、んふう…
…、ちゅぱりへ、んちゅ…、れる、れわわ…
…、ん、れへへへへへへへ、じゅるへ、じゅるるるる
る…」

エミリア

エミリア

「ああ～んひいじ～～～～おおおお～お、お、
お、お、お、お、お、おおおお～おひほおおお
お～～～～～」

エリア

「はあ、はあ……ん、んん……あ、ああん♪
やあ♪ 叔父様あ♪ 私もお♪ ん、んふう♪
あ、あ、あ、あああううう♪」

「ああ♪ あ、あ、ああああ～～～～！ ん
ひいい…………… あああ…………… も、もう駄目
…………… 私も、もう余裕が無く…………… んん
ひいい…………… おほおお♪ お、お、お、お、
お、お、お、おおおお～～～～！」

Hミコア

「あああ……！ あ、あああ……！ 叔父様ああ……！ 叔父様もお！ 一緒にいこ……！ 今まで溜めた性欲の全てを……！ 全部、私の下腹に吐き出していくださこせええ……！」

Hミコア

「んほおおお……！ おおおお……！ お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、おおお……！」

Hミコア

「あああ……！ イ、いぐうう……！ う……！ あうう……！ イ、イグイグイグイグイグイグイグイグう……！ ん、んひい……！ お、お！」おおお……！ お、おおおお……！ お……！」

Hミコア

「あああ……！ あ、あああ……！ イグイグ……！ イグイグイグイグイグイグイグイグう……！」

Hミコア

「あ、あ、あ、あああ……！ あ、あああ……！ おまん！」ついでさりげなく「うううううううううう……！」

Hミコア

「んひいいい……！ おおおお……！ おおおお……！ おまん！」ねおふ、ああ……♪ 下腹のおぐうう……♪ きじまひゅうう……♪

エミリア

「せ、はひじる……、おほおね、お、お、
おおおーーーー、おほおお、ああ、とふと
ふつてえ、ああ、散々溜めにきた叔父様の性
欲が……ああ、十面に晒してますわ……！」

エミリア

「ああ……♪ いいれすう……♪ 叔父様あ♪
ああ……はいい♪ 遠慮しないでください♪
聖女を孕ませるつもりで、思いつ切り……欲望の
ままにぴゅつぴゅしてくださいませえ♪」

エミリア

「はあ、はあ……♪ ああ♪ 叔父様あ……♪」

エミリア

「わわわ……わ、一緒にい……わ、ねわんぱひなつ
ひなわ、ねわんぱひなつひなわわわ、はあ、はあ
わ、あわわ、ねわんぱわわ、ねわんぱねわんぱね

エ
ミ
リ
ア

エミリア

「まあ、まあ……、ねえ？」机をうたぐる。

エミリア

「え、ええい……、ああ、うう、わわ、
ねがんせわね、ひよひよ、ねがんせひよ
ひよ～～～」

Hミコア

「ああ……♪ あ、あうううううう♪ はあ、はあ
……♪ お、おおおおおおおおおおおおおおおおおお
ん、んあ……♪ あ、ああああああああああああ

Hミコア

「ふふふ 金玉もしおれときて……叔父様も、これ
で打ち止め……ですね♪」

Hミコア

「ん、はあ～～～♪ はい、お疲れ様でした♪
これで叔父様の中にいた淫魔の呪いも、全てザー
メンと一緒に吐き出されました」

Hミコア

「これからはきっと、夢精する事もなくなる……詫
ではないですよね……♪ だつて、もしかしたら
今日の私とのひめ、ゴトを夢に見て……夢精♪ し
てしまふ可能性だってあるのですから♪」

Hミコア

「ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
別に構いませんよ？ 本田の事……思
い出してオナニーしてくださつても構いませんし
……」

Hミコア

「また夜にでも教会にいらしてくだされば……呪い
など関係なく、いつでも私が『奉仕しておじ上げ
ます……♪』

Hミコア

「だつてえ……私もこの田舎で独り身なものですか
ら……どうしても！」……おまんこが寂しくなつ
ちやう田もあるまゆので……♪」

「叔父様？ どうが……」れからも末永く……聖女とのあまく湯けるような夜の宴に……お付き合いくださいね？ ふふふふ……」「